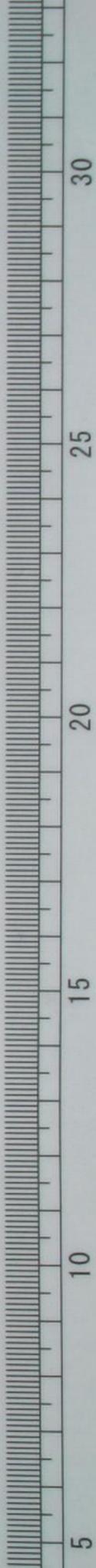


養病漫筆

六

特別
14
1919
507



小篆

佛

悲
會
居士
敬篆

同治二年十月



(八)

は自らもあやまのいっじあゝ病角段をいふまゝにきき
 あふらるゝあやまのいっじあゝ病角段をいふまゝにきき
 り判者とていへりいへりいへりいへりいへりいへりいへり

能、歌舞伎の珍本五千冊 演劇博物館に寄贈

我が國でも屈指の大蔵持たる安田
 文庫から、豊後重隆の「能楽、歌
 舞伎、人形浄瑠璃、寄曲」関係の
 稀冊書に約一千部、冊数にして
 五千冊がこのほど早大の演劇
 博物館に寄贈された。特に能楽
 本、光悦本、卯月本等各種の珍本
 が歴史的に極めて重要な資料に
 とつてはまたなき言難である。こ
 の寄贈コレクションは先年物故し
 た松道寺主人こと二代目安田善次
 郎氏の蒐集にかゝる貴重なもので
 同氏は演劇博物館の設立発起人で
 あり生前にも歌舞伎浄瑠璃大正冊

の寄贈をしてゐる
 今回寄主の安田一氏は「自分は
 特に深い興味を持つてゐないの
 で、徒らに死蔵するよりも有効
 に活用することが故人の志に副
 ふ所以である」との見地から
 同冊に二度目の大蔵寄贈となつ
 たものである
 内容を要すると、先づ五千冊を
 越える中に一冊の活版本もない
 すべて写本か板本ばかり、前記の
 系本を初め能狂言ものには「猿樂
 開書」の標な標本以下、他見すべ
 からず」との講評のある能楽、口
 傳等特異なる歌々、寄曲関係では
 故六郷新三郎が苦心蒐集せる長唄
 の古板本一千部、歌舞伎書の中に
 は、元禄十二年に近松門左衛門が
 書下して坂田藤十郎等が京阪で演
 じたと許りしか知られてゐなかつ
 た「けいせい佛の原」を元禄十六
 年に江戸で中村七三郎が演じた時
 の板本があり、歌舞伎史に新発見
 を提供する等々、また未だ整理中か
 ら早くも活版を授けてゐる

い演劇の団体も能、浄瑠璃
 冊を寄贈して来た此件につき
 松久回りの救済の必要を
 いふを任漸々此の寄贈
 以前後長を報へる

は自ら見あやまのいつかある角程をいふ事なきと
ある正當なる事なきは、履物と別するは、花あひたるの
り判者と近しく、彼を苦情を申出で、存命することとす。

○在田文庫も、美咲子の遺書持込、浪割と関係も能く、浄瑠璃
お氏の回も九百八十部作五十冊と書か、来る此件につき
余も関係有り、本年夏ある方に、根え回との教を、此の前後を交
け、三打作法を、扱し、此の事、は、漸々、此の事、行
き、未だ、実物と、いふ、河野、彼、長と、報、い、ま、す、
と、い、ふ、事、

○十二月二十三日、本務地、お北、満、中、浦、村、没、地、に、上
り、て、妹、克、に、家、督、を、お、後、せ、い、と、い、ふ、件、も、さ、り、い、ふ、事、
も、送、す、此、も、家、督、の、正、案、件、も、さ、り、い、ふ、事、
も、送、す、此、も、家、督、の、正、案、件、も、さ、り、い、ふ、事、

藤原製

友好の相互の領

大正十三年四月二十二日
藤原製
大正十三年四月二十二日
藤原製

右人の数と所とを録し三〇と行て一冊成る事として行中係
ありと云ふもあはれ也。事存にせしむる中一婦の者を
獲す所物所なくし但利^レ余と存てお母是れ可貴
耳し昭和十五年十二月廿四日。

○今次の新体制に就ていろいろ書留の事と想ひ出され、今社の事務
の取方と聞しては自人も数ヶ月奉仕して三ヶ月分社の事務と進捗を
さうと得るに、三ヶ月分は今社とさう書留の一個のよみあつて、其の
本社に南房崎町に置かれ、二階建の日本建築であつた。金庫は
あつた倉庫が社長副社長も重役も狭い室に居て是れ毎
日社員の退社時と銀を握りの張の張と此の金庫は自
納めがらうと云ふ。自分は運賃深きとして二階におかれ、階下
より部長其他があれ。まは今社部は運賃深きカサの二部あり

藤原製

此外に新設と云ふ一部もあつたが、機構は安泰の間にあつた。今ま
て見て、ふつと百名不足と云ふ社員はあつた事務が軌のたよと云ふ
ふき漏れは、東京支店に此の本社の中に入つた。此会社の但蔵は岩
崎氏と云ふ社長の助を副社長と云ふ義孝や川田 也^註田平
上野部と云ふ重役であつた岩崎氏はと旦那と云ひ強し能と若旦那と
呼んでおれ、他の重役は政府の内閣委員と云ふきよと、役員は体制
ハ勅令天判の高級の官制と云ひ、若はまるとい呼ばるるが、月給を
此三階級に準して定まつておれ、部員の関係は次々社員は、自分の
おき進賃深きも責任の準はまきとあつた。冬冬の俸給も通例の分
社員のよ厚かつたやうと思ふ、職務の規則も別々特長のあつた。社
てよんが、社の習慣も勤勉が社員の常習、朝の出勤は早
まを勉め、社を家に出勤前日れを分け、所があつたが、部長の言

楮は風味に富むを焚火に用ゐるを尤いと試せり

楮焚くは戦場を思ふに露夜に

楮焚くは尾根の嶺を越へて夜に

楮焚くは市井の山脈の夜に

楮焚くは酒を枕に夜をあかす

楮焚くは天窓を越へて夜長に

楮焚くは圓窓の内を照らす

楮焚くは義経を語る客に

楮焚くは富士原を越へて山の南

雪道の陣の入り口に

陰翳の鏡に千六百年の光

藤原製

雪ふりともあらず其の夜の籠

つくし割る楮に運田や冬に

古軒のあふりくえくす水柱

楮焚いて一茶を 千六百年の光

①川村の奉行の日記に於て此の出来事と云ふ事
 時勢の練はるる札、書はるる札、此れは法に於て
 出されしものと云ふこと

高札場は、本町四の丁なる町會所前に並列され、それにはまづ忠孝札、切支丹札、浦觸札、毒藥札、公儀札、何事によらず
 札、御傳馬札、人賣買札、領内驛馬方札、人足賃銀札、諸國廻船札の十一枚が厚さ八分の板で作られ、當時の重要な法典が
 かうして僅かに十一枚の札に記され、それで社會の秩序安寧が保たれてあつたのだから、世間の純朴さが思ひやられる。

十月十八日 村雨又雪霰風烈
 一、今日は源之進は、地塙立合見分、勝杭打たせに出で、又太郎は、圍粉改請取に相越し、兩人共夕刻届出る。
 一、粕屋房之丞、牢屋圍人請取候参届出る。
 一、又太郎は明日も糶米改に相越候旨申聞ける。

以上、地境の立會は、新潟——寄居、關屋、出來島新田、西鳥屋野島との間の境界である。寄居村は弘化年中に長岡藩に上
 知せしめて新潟町へ編入されたが、本來寄居は承應年中新潟町のうちへ割込んだもので、地續きの一廓をなした土地である。
 西鳥屋野島の勝示杭は、今も學校町通三番町にその遺影をこめてゐる。

圍粉は備荒貯藏米である。嘉永六年中、この備米倉庫が二棟建てられ、糶五千俵がこのうちに貯へられ凶年に備へられたが
 引續いてその後一棟増築、更に安政四年に一棟の建増築となつたもので、それで長二十間、横五間、五戸前一棟のものが三棟
 長二十三間、横五間三戸前のものが一棟、合計四棟で四方は漆喰塗、瓦屋根で、ちよつと當時は變つた異風景に眺められたも
 のであつた。幕府直轄領の時代には糶三萬五千俵、石數で一萬六千石餘、麥四百二十六俵、此の石二百四十八石を備入れ、非
 常用意に充てた。明治初年に三棟は新潟學校の校舍に、二棟は新潟病院に充てたとあるから、安政四年以後更に一棟の増築が
 あつたらしい。新潟學校と云ふのは今の新潟醫大の運動場のところであり、新潟病院は海軍人事部のある、かの一廓のところ
 であるから、備荒倉の位置は明瞭である。

榎原製

加の流初年如の事、其の教習を文の學校は備忘録
 の為記す、今この流の運、動場と云ふ所が、昔は
 あつたこと、倉庫の模、様を記すこと、か
 板と取めて置く、(古志路所載)

○主事等子按初代校長より江戸藩士の胸像を必すに見よ
他名法と出所より其自合しと致す所のいたる文の如く
……切ぬきとある……

○元嘉七年壬午歲二月廿七日午後六時終に逝く
川谷の中庭に罹り年六歳長じいつ死ぬと云
未だ思ふ折柄を現に世界に母を母と云ふ病
氣の昨年より初まらば時々の往床と敷いたるに
より一歩かへりて時間未に入らざるに
本年十月以所に伏し居りて立偏も出果さず
しか十二月十日殊心志を起して進々より病
七年傳つて蓋々重態となりて此の三四年可哀
折を與え
あり初め振動と爲る外に脚部を挫折し、胸骨の
此處に
多々の日あり、其後肺尖に罹りて幸い此處を
かき除咳嗽と困りて一息の於断りて一脱と
あり、只幾まの治癒を待つべしと云ふが若
るは終に世界

深淵

すむらひ、殊心志を起して進々より病
かき除の若さるる一息あり、時完ぬ脱遂に
る悲しむるも、其後肺尖に罹りて幸い此處を
は幸一と縁同しと云ふ、此れ心脈麻痺を
後いふは、其長めは同一ことす、は
に不測の事あり、其時を以て、胸の
其の素傷の間に、其夜春夜の
日間の當り、其年の病に、其後
が素傷に、其時の中を、其
其の、其の不幸の、其の病に、
つと切らぬ、其の病に、
の範圍に、其の病に、

金五十九回五十九	兼具馬
金五十七回八十八	火藥坊
金五十四回	善化寺礼
金三十九回六十二	大日如来御台地
金五十五回	切手其他法写物
金八十二回	火藥坊
金	自願車五台
金四十回	吉勢三台
金三十一回五十九	大工 依橋馬人
金了七回六十五	懸字 梁四寸分
	十寸 竹抄
	足代

六六六十九回十一

棟原製

大工 依橋馬人
市島 手市島 丸末海

取取身寄 在羊子島附近居住

市島佐厚	市島長代	和名五郎
丹兵衛	竹島海	重極泰之
久吹者	和名賢壽	大木操
栗本	吉田春之介	吉田三夏
真島典二	池谷一介	下林一作
錦田持色	金津八一	竹島叔心
賀田直次	市島成二	二十家

あつた何れかよふと云ふ事あるに感へばつとすゝむと云ふ
京都ある大徳と見ゆことあるに感へばつとすゝむと云ふ
津左と云ふ事あり、あつた五箇のあつた二箇あり、甲州街道の橋
橋と云ふ事あり、一夜あるに感へばつとすゝむと云ふ
行のあつたあつた事あるに感へばつとすゝむと云ふ
た。

あつた事あるに感へばつとすゝむと云ふ事あり、甲州街道の橋
橋と云ふ事あり、一夜あるに感へばつとすゝむと云ふ
行のあつたあつた事あるに感へばつとすゝむと云ふ
た。

深河

婦のけしみのかうりに大かきことあるに感へばつとすゝむと云ふ
三味線を奏する子をおうとすゝむと云ふ事あり、甲州街道の橋
橋と云ふ事あり、一夜あるに感へばつとすゝむと云ふ
行のあつたあつた事あるに感へばつとすゝむと云ふ
た。

自分の上達やと云ふことあるに感へばつとすゝむと云ふ事あり、甲州街道の橋
橋と云ふ事あり、一夜あるに感へばつとすゝむと云ふ
行のあつたあつた事あるに感へばつとすゝむと云ふ
た。

段後遺物と云ふことあるに感へばつとすゝむと云ふ事あり、甲州街道の橋
橋と云ふ事あり、一夜あるに感へばつとすゝむと云ふ
行のあつたあつた事あるに感へばつとすゝむと云ふ
た。

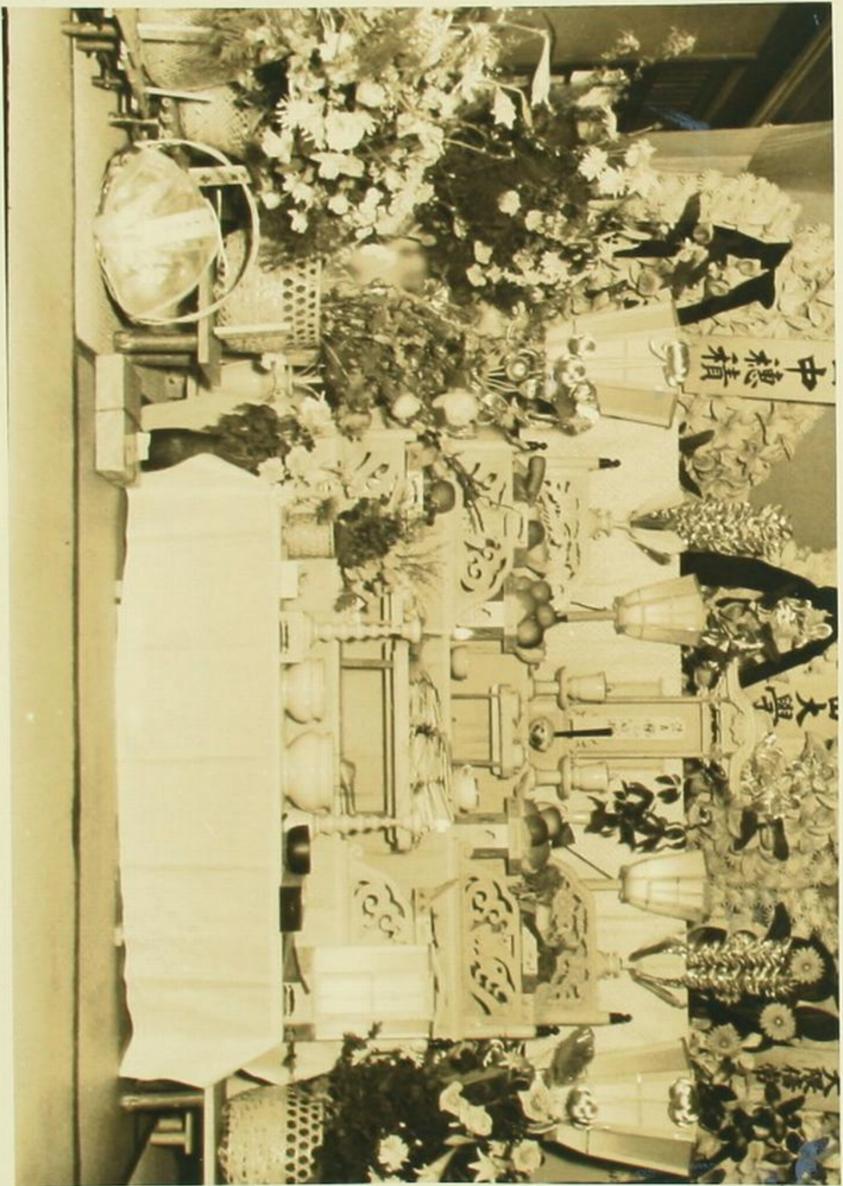
そのころは、歌、未だ交遊せざるも、先づも期待せしむる
今に至りて、いづれ卒業せしむる家にて、教養を修むる方と
今後の問題は、是れも未だ詞子も、さういふ事、其は
みだりなり

妻ハ切のから動物を、言へん、安女の代へ、野馬の、騷
洋文を二匹、まる、向、美、一、九、猫、の、二、三、日、近、飼、つ、た、こ、と、あ、る
動物と、さ、は、節、韻、で、一、度、一、日、か、自、分、は、動、物、保、護、會
と、い、つ、て、い、ふ、こ、と、あ、る

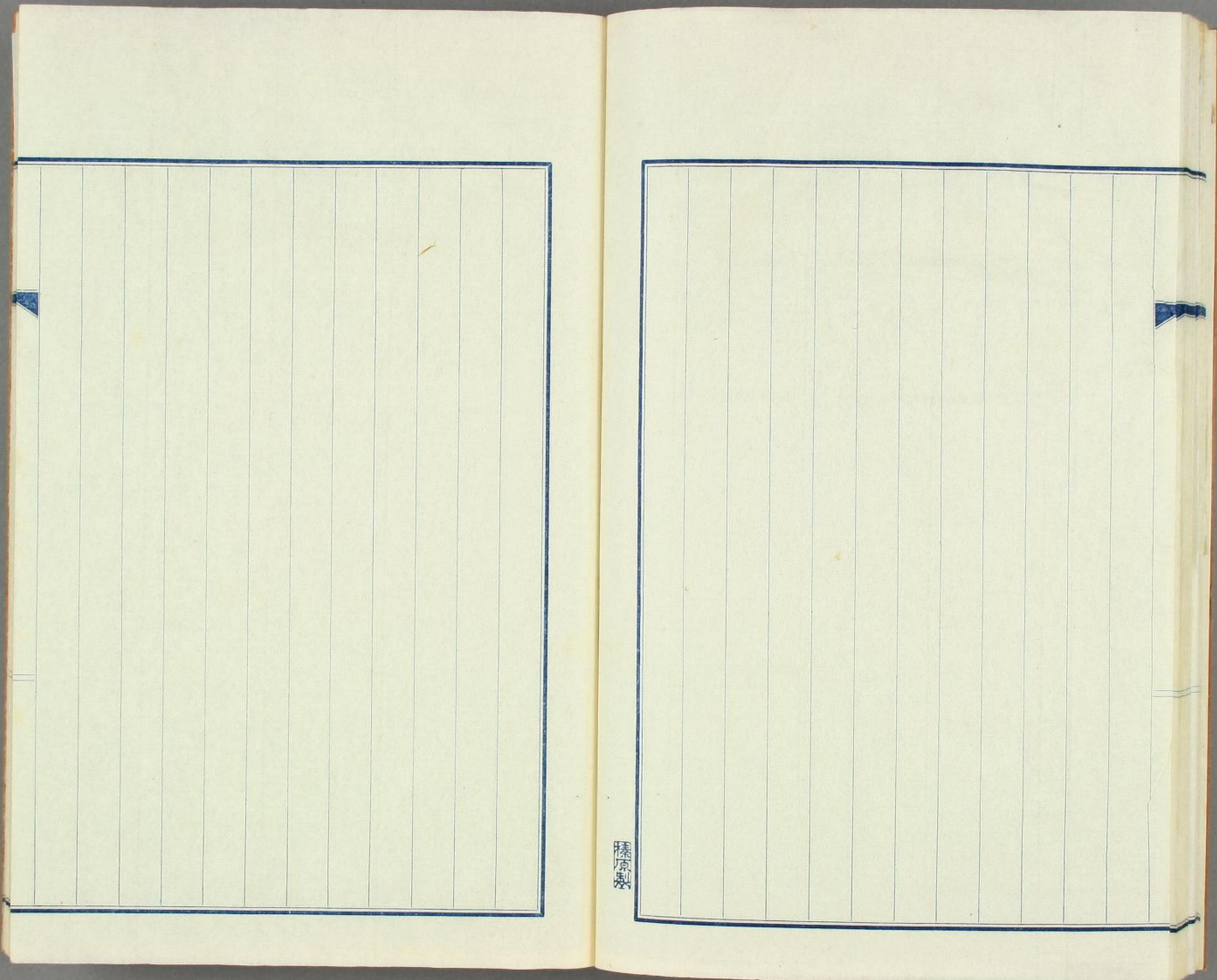
食、物、で、は、格、別、味、味、無、う、た、が、果、物、と、鳥、肉、が、あ、る、は、時、常
か、こ、う、か、つ、た、鳥、肉、の、味、は、な、い、の、か、多、か、つ、た、が、香、魚、は、大、分
で、食、を、論、議、を、結、ぶ、れ、由、緒、や、難、い、食、を、こ、う、い、ふ、こ、と、あ、る、鳥
肉、は、洋、食、に、あ、る、と、い、ふ、と、味、の、好、む、か、つ、た、が、い、ふ、こ、と、あ、る

深河

種々の、動物、の、食、料、を、考、へ、し、て、も、其、の、好、む、味、の、物、を、食、べ、し、て、可、い
り、味、之、の、あ、る、人、は、あ、る、と、い、ふ



藤原製



藤原製



中村正直遺印
文曰 中正直印
作者不詳



淺野樸堂遺印
文曰 臣長祚印
作者不詳



池田孤村遺印
文曰 藤原三信
作者不詳



川路聖謨遺印
文曰 源聖謨印
佐久間象山刻



中村正直遺印
文曰 一號敬字
作者不詳



淺野樸堂遺印
文曰 胤郷氏
作者不詳



池田孤村遺印
文曰 蓮庵
作者不詳



藤本鏡石遺印
文曰 鏡石
羽倉可亭刻



橋南谿遺印
文曰 春暉堂
作者不詳



橋南谿遺印
文曰 醫持意耳思慮精得之
作者不詳



高久鶴屋遺印
文曰 鶴屋
自刻



中山信天翁遺印
文曰 學山堂印
自刻



狩谷披齋遺印
文曰 披齋
作者不詳



湯嶋狩谷氏求古樓
圖書記
作者不詳



板倉勝明遺印
文曰 板倉勝明
吳北諸刻



板倉勝明遺印
文曰 子赫氏
吳北諸刻



高橋泥舟遺印
文曰 執中庵主
圓山大迂刻



高橋泥舟遺印
文曰 泥舟半漁
圓山大迂刻



永井禾原遺印
文曰 永井久印
河合繁廬刻



永井禾原遺印
文曰 耐父
河合繁廬刻



高嶋秋帆遺印
文曰 源秋船印
作者不詳



中嶋子玉遺印
文曰 中嶋大貴
作者不詳



春木南湖遺印
文曰 南湖
作者不詳



尾藤三州遺印
文曰 獨醒樓圖書記
高芙蓉刻



卷菱湖遺印
文曰 卷大任
作者不詳



卷菱湖遺印
文曰 任
作者不詳



辻元山松遺印
文曰 侍醫法眼辻元山松
作者不詳



熊倉翠原遺印
文曰 翠原
卷菱湖刻



間部松堂遺印
文曰 間勝
作者不詳



間部松堂遺印
文曰 字慈卿
作者不詳



細井九阜遺印
文曰 知文之印
自刻



細井九阜遺印
文曰 關阜
自刻



木戸孝允遺印
文曰 木戸孝印
作者不詳



木戸孝允遺印
文曰 松菊
作者不詳



市嶋肅文遺印
文曰 市嶋肅文
作者不詳



市嶋肅文遺印
文曰 仿海
作者不詳



源頼寬遺印
文曰 觀濤閣
作者不詳



大倉雨村遺印
文曰 伯行之印
徐三庚刻



日柳燕石遺印
文曰 柳東政印
作者不詳



高嵩谷遺印
文曰 嵩谷印
作者不詳



篠崎三嶋遺印
文曰 筱應道印
作者不詳



大倉雨村遺印
文曰 顯言
徐三庚刻



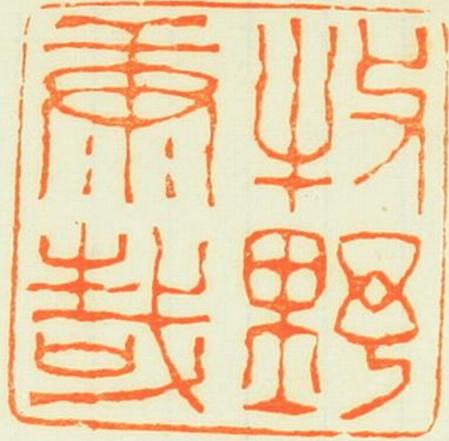
日柳燕石遺印
文曰 燕石之印
作者不詳



細川林谷遺印
文曰 林道人
自刻



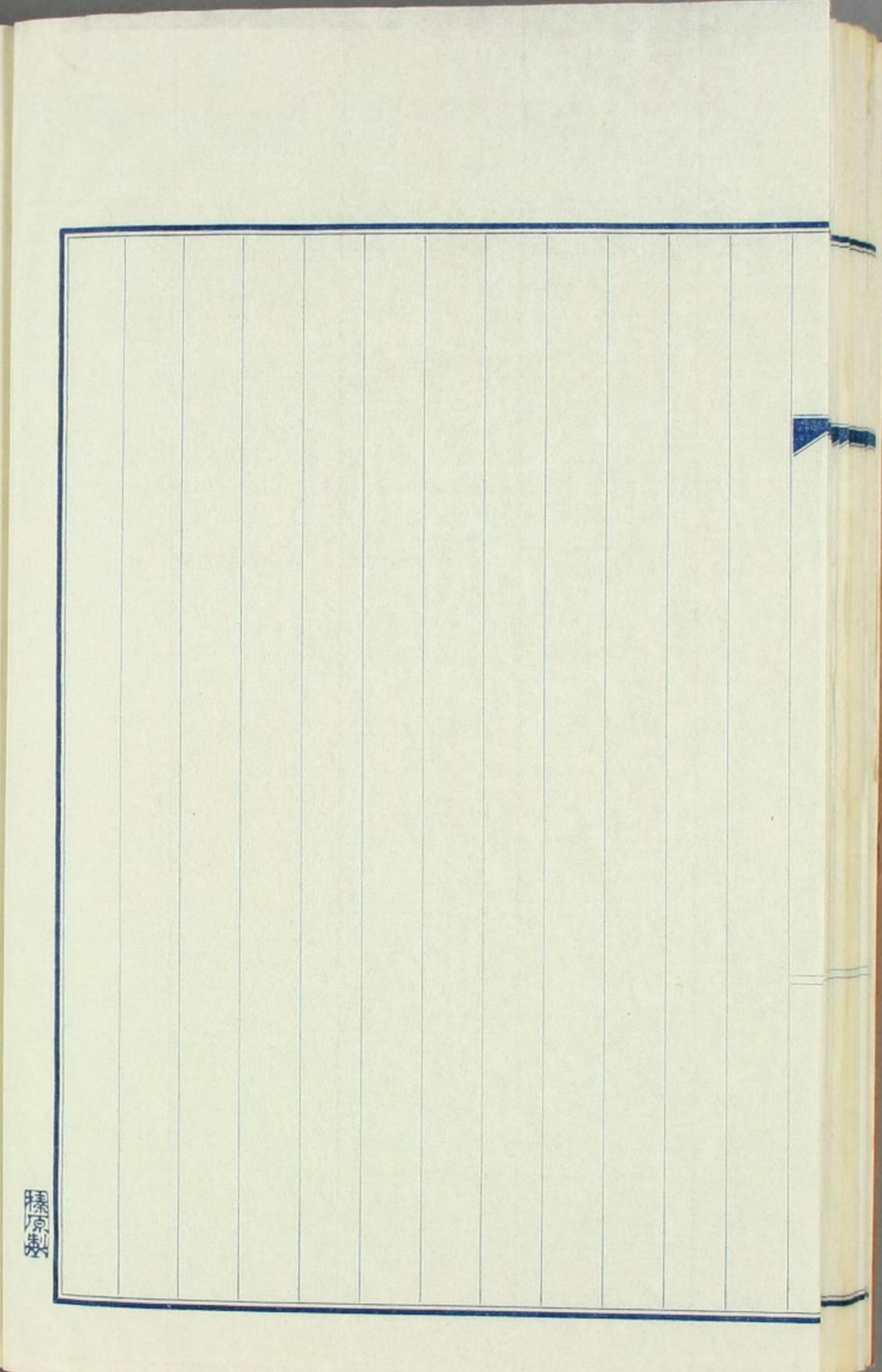
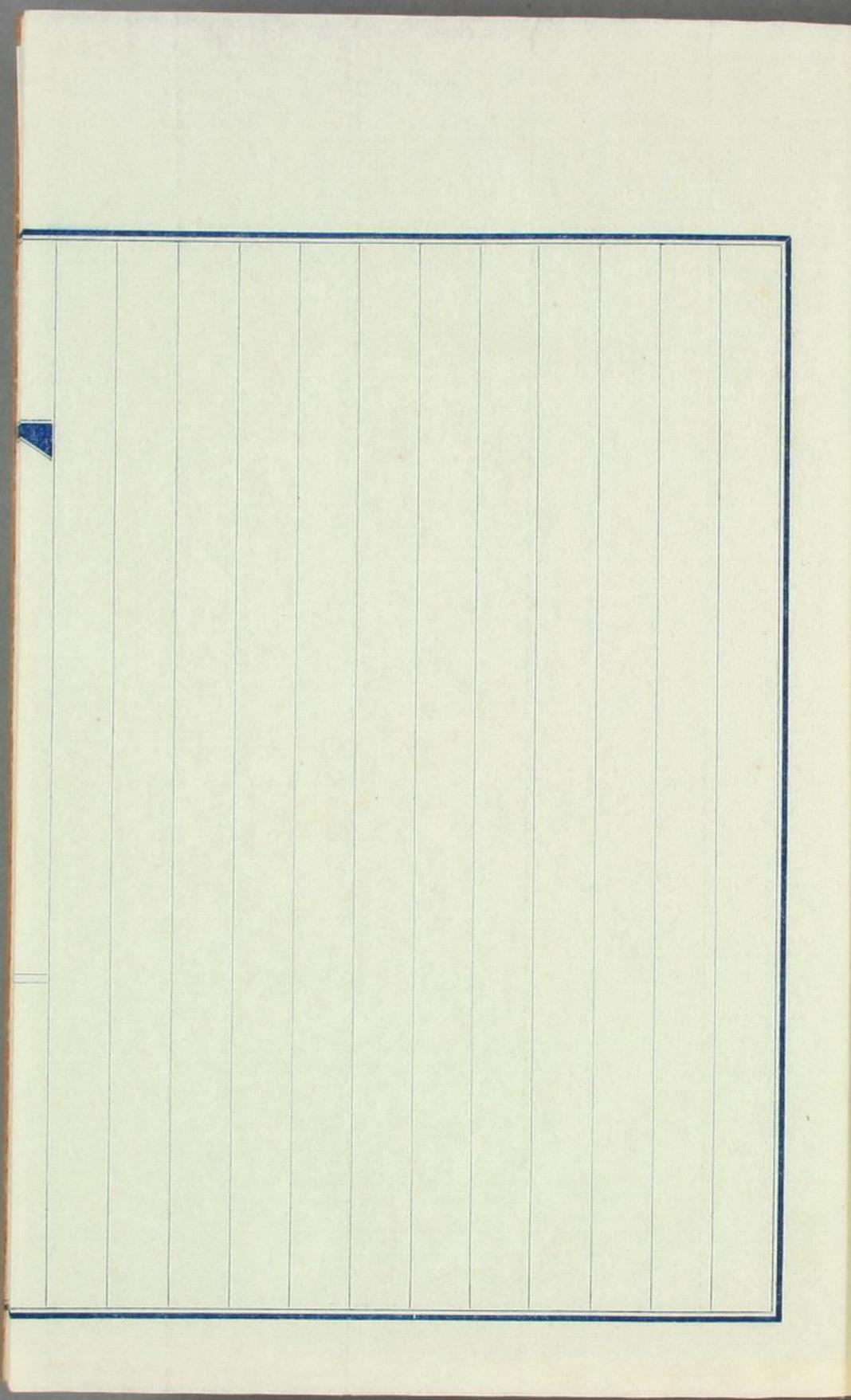
長三洲遺印
文曰 長莢之印
作者不詳



牧野康哉遺印
文曰 牧野康哉
長岡支藩主日谷刻



中林竹洞遺印
文曰 玉禪室
細川林谷刻



標原製



林則徐遺印
文曰 林則徐印
作者不詳



林則徐遺印
文曰 少穆
作者不詳



吳大徵遺印
文曰 御書中丞
自刻



吳大徵遺印
文曰 吳大徵印
自刻

自分が往年印の蒐集に没頭して得た収獲は千類にも及ぶが、其内の半ばは名家私印である。誰れの私印が欲しいと云ふも得らるものでなく、唯だ偶然見當つたものを取り上げたに過ぎないが、別號などの印は辨じ兼ねて逸したのも少からずあるであらう。支那刻の印に往々人の名を刻したのもあるが、其の

人の素性も閱歴も分り兼ねるので、林則徐、吳大徵の二人の外は一切採らない。扱て十四五年没頭して百家にも満たぬ私印を獲たが、之れを散することは自分としては惜しい感があり、何とかして堅牢な印塔でも作つて永久に保存したいと思ふてゐる。

以下
4丁
白紙

